

〔論文〕

## 都市魅力と“消毒”都市 その2

——名古屋都心における戦前・戦後の路地空間の生成と消滅過程に関する論考——

井 澤 知 旦

名古屋学院大学現代社会学部

### 要 旨

路地は、居心地がよく、文化を生み出す空間であり、都市魅力を高める要素としての評価がある一方で、防災性能が低いといった負の都市遺産と見なされるなど、評価はせめぎ合ってきた。戦前は江戸時代から受け継ぐ脆弱な都市基盤の上に増加する人口等を受け止めたため、多くの路地空間が生成した。碁盤割エリアでは会所の宅地化が、白川・大須エリアでは寺院所有地の宅地化が路地を生み出している。戦災に伴う復興土地区画整理事業により道路は拡幅され、筆が整形されたため、路地は大きく減少した。戦後も路地は生成していったが、昼間人口の増加に合わせて、複数筆の上に大規模ビルを、1筆上に多層階ビルを建てたりすることで土地の高度利用化が進行し、路地を駆逐していった。都市魅力を向上させるために復興事業で生まれた公共空間の活用や広い道路で囲まれた街区内に通路ネットワークを形成するなど都市空間の多様性を増すことが求められている。

キーワード：路地空間、生成と消滅、碁盤割、消毒都市、都市魅力

## A study on creating urban attractiveness at the “sanitized” area in downtown, Nagoya, Part II

—— A focus on the process of disappearance and generation of  
“neighborhood” spaces as an element of urban attractiveness  
between former and after World War II ——

Tomokazu IZAWA

Faculty of Contemporary Social Studies  
Nagoya Gakuin University

---

※本稿は、2017年度～2019年度名古屋学院大学研究助成（共同研究／課題研究／研究代表者：井澤知旦）を受けた成果の一部である

発行日 2021年7月31日

# 1 はじめに

## 1-1 問題の所在

都市魅力を高める要素の一つとして、路地空間や商店街アーケードが注目されている。そこにはヒューマンスケールの空間を構成し、コミュニティ的まとまり感がある。また年配層にとっては昭和的ノスタルジーを感じさせ、若年層にとっては先読みできる近未来とは正反対の未体験感覚を引き起こす、“独自の居心地のよさ”を提供している。全国的な路地（横丁）空間の代表として、戦前から引き継がれている法善寺横丁（大阪）や戦後に飲み屋が集積した新宿ゴールデン街（東京）があるが、様々な人々が行き来することで、文化を創出する空間装置となっている（参考文献1～5）。他方で路地等は地震や火災に対して、防災性能が低い貧弱な都市基盤＝負の遺産の地区と評価されている。よって、それらの防災性能を高め、土地の高度利用をはかり、スクラップ＆ビルドしていくなかで、近代都市化を推進してきた。

このように路地等は文化創出装置であり、都市魅力を惹き出す空間であるので、残存させようとするニーズと、防災性能が低く低度利用地といった負の都市遺産として改善すべきニーズとのせめぎ合いの歴史であった。しかし多くの場合、特に戦後の高度経済成長の過程で、それらの空間は都市再開発がなされ、消滅してきている。つまり文化的（情緒的）ニーズよりも経済的ニーズのほうが勝っていた。また大震災や大火災、戦災の復興のための都市基盤整備はより強力で面的に路地等を消滅させてきた。このような不可逆の流れのなかでも、残存している路地等もある。冒頭に述べたように今日では都市空間の多様性こそ都市魅力を高める大きな要素との考え方が浸透してきている。そのため、路地等はどのように生成・消滅していくのかのプロセスを明確にし、今日的ニーズに添えていく必要がある。なお、ここで「消毒都市」という用語を使用しているが、路地等の防災的にも土地利用的にも負の都市遺産を、例えば復興土地区画整理事業によって一掃することを「消毒」と呼んでいる<sup>1)</sup>。

名古屋は江戸時代の都市成立時期から都心部は碁盤割であり、その基本構造は変わらず、今日に至っている。しかし第二次世界大戦によって市街地は焦土と化した。その後の復興土地区画整理事業によって、近代都市に相応しいように道路は拡幅、公園は拡充され、土地の筆も整理されて、土地利用は大きく変化した。これに伴い路地等も大きく変化したと考えられるが、その実態は明らかになっていない。

## 1-2 これまでの研究

著者は本学論集 Vol. 57 No.1<sup>1)</sup>にて、次の4つの点について明らかにした。

①江戸時代の江戸の町と名古屋の町を比較しながら、方格子状の街区を単位としてみると、いわゆる路地空間の形成は人口密度（江戸：名古屋＝1：3）と街区規模（1辺60間：50間）、1敷地（筆）奥行（20間：主に15間）が相違しているため、名古屋は相対的に少ないこと、②名古屋の復興土地区画整理事業により、都市の防災性能の強化・向上、自動車社会への対応、都市の機能集積の強化に対応することが可能となった一方で、碁盤割での街路拡幅により、沿道は類似の規模・用途・利用とも画一的になり、また墓地の集約移転や路地空間の消失により、“界限”の魅力を低減させている。

③全国的にも活況のある商店街の一つである大須地区は、戦前には社寺が集積する南寺町を形成していたが、戦災復興事業を実施することで都市基盤の整備を行うも、多様な街路幅員構成が店舗の多様性をもたらし、いわゆる“ごった煮”感を生み出して、商業空間としての魅力を高めている。④すでに都市基盤整備がなされ、画一的な都市空間に新たな限界性を導入するために、街区内の建物内および建物間に多様な路地・通路（パサージュ）を設置し連結することで、街路環境・通路環境の多様性を確保していくことが必要である。しかし、ここでは戦前から戦後、そして戦後から今日までの路地等の変遷については明らかになっていない。

名古屋の格子状街区内（中区・東区の一部）を対象に、杉浦大地他が1965年から2013年までの6時点（概ね10年間隔）の住宅地図をもとに戦後の路地空間の変遷とその使い方について調査している<sup>2)</sup>。そこでは経年とともに路地空間の個所数、延長距離、路地空間面積ともに減少の一途をたどり、延長距離では1/3以下になっている。また静かで落ち着いた路地空間はコミュニティを育む場所となっているが、高齢化が空間およびコミュニティの維持を困難にし、通り抜けの路地をもつ住商混合地区では不特定の人々が行き来することで、良好な住環境が損なわれていると指摘している。これらの研究においても高度経済成長後の都心空間であり、戦前との関連性が明らかになっていない。また、何ゆえに路地空間が減少したのかの要因分析がなされていない。

### 1-3 研究の目的

名古屋都心部において、第二次世界大戦前後は都市空間が大転換した時期である。復興土地区画整理事業によって、道路は拡幅され、土地の権利関係や形状が整理された。そこで本研究は戦前から戦後、すなわち1933（昭和8）年から1996（平成8）年までの約60年間において、20年間隔で路地等がどのように生成し、消滅・変形していったのかを明らかにする（最新の路地実態については参考文献6を参照）。また、その要因についても分析する。路地等の生成・消滅は土地の高度利用形態の一種であるので、地籍（筆形状）の土地条件や敷地の立地条件（幹線道路沿いか否か）、また人口密度との関係から整理する。これらを通じて、復興土地区画整理事業が路地等空間を消滅させ、都市魅力を低下させたという直接因果だけではなく、経済成長による土地の高度利用化が消滅させる要因でもあったことを明らかにする。

### 1-4 研究の方法

路地等の実態は住宅地図をもとに把握した。戦前・戦後を通じて概ね20年間隔となるよう住宅地図を確保している。戦前の住宅地図「名古屋市居住者全図昭和4年調・昭和8年調」は作成者が不明であり、所蔵する鶴舞中央図書館には市役所作成との伝承があるようだ<sup>3)</sup>。建物については悉皆調査がなされており、精度は高いが、距離や面積的には今日ほどの精度はない。戦前の住宅地図はできるだけ終戦に近い地図とするため1933（昭和8）年を基本としているが、その地図は汚れて読み取り不能部分があるため、不能部分は1929（昭和4）年を補足地図として活用した。1955年発行の名古屋市住宅案内図帳は地図的精度が低く、利用者名・居住者名が書けるように地図を変形させているので、地籍（筆）図や敷地面積との対応は全く一致しない。相対的位置関係がわかる程度である。1996年

発行の住宅地図は地籍（筆）図や敷地面積とも実態に近いと想定され、1975年住宅地図は1955年と1996年の中間的精度となっている。（表1）

表1 使用した住宅地図一覧

| 発行年          | 住宅地図名          | 発行者     | 備考           |
|--------------|----------------|---------|--------------|
| ① 1929・1933年 | 名古屋市居住者全図      | 不明      | 昭和4年調・昭和8年調  |
| ② 1955年      | 名古屋市全住宅案内図帳    | 名古屋住宅協会 | 地図としての精度は低い  |
| ③ 1975年5月    | 名古屋市全商工住宅案内図帳  | 住宅地図協会  | 地図としての精度は中程度 |
| ④ 1996年10月   | ゼンリン住宅地図名古屋市中区 | (株)ゼンリン | 地図としての精度は高い  |

次に路地等がどのように生成・消滅したかを地籍（筆）から分析するため、下記の地籍関連図を活用した。戦前の地籍は情報が少なく、愛知県名古屋区地籍全図は明治18・19年作成の図面だが、精度が高いためそれを参考としながらも復興土地区画整理換地図（または地籍図）施行前と施工後をもとに分析を行った。（表2）

表2 使用した地籍関連図一覧

| 発行年                    | 図面名               | 発行者  | 備考           |
|------------------------|-------------------|------|--------------|
| 1885・1886年             | 愛知県名古屋区地籍全図       | 愛知県  | 市制100周年記念復刻版 |
| 復興区画整理事業のための測量・図面化完成各年 | ①公共施設用地図（施行前）     | 名古屋市 | 中一・二・三工区     |
|                        | ②復興土地区画整理換地図（施行前） | 名古屋市 | 中一・二・三工区     |
|                        | ③地籍図（施行前）         | 名古屋市 | 白川工区         |
|                        | ④換地図（施行後）         | 名古屋市 | 中一・二・三工区     |
|                        | ⑤確定図（施行後）         | 名古屋市 | 白川工区         |

最後に、国勢調査をもとに常住人口・昼間人口から人口密度の変化を追い、土地の高度利用化が進むなかで、どのように路地等が消滅していくのかのチェックを行った。

### 1-5 研究対象の範囲

研究対象の範囲は図1のとおりである。大きく3つのエリアに分けた。すなわち北は碁盤割エリア、中央は白川エリア、南は大須エリアと呼称し、区分する。

碁盤割エリアは全碁盤割（東西11街区×南北9街区＝99街区）のすべてを対象としているので、他のエリアとでは東西幅が異なる。

白川エリアと大須エリアは戦災復興後の広幅員道路である若宮大通を境に上下を区分している。ただし、戦前には若宮大通が整備されていないため、白川エリアと大須エリアを明確に区分することできない。その



図1 研究対象の範囲

ため、戦前においては白川エリアと大須エリアを一括して、白川・大須エリアとして分析する。このエリアの西境は伏見通、東境は天津通である。

## 2 戦前の路地分布

### 2-1 路地のタイプ分け

路地にはいくつかのタイプがある。それを類型化・単純化したものが表3および図2である。

道路（公道）から人々を街区内に引き込む路地をここでは6つのタイプに分類している。ここでの「路地」は複数の住戸（敷地）へ行き来するための通路としている。参考で示した⑩旗竿型は一つの住戸（敷地）にアクセスするもので、路地というよりも延長敷地という捉え方であり、かつ実態として路地数の半数前後を占めるので、合計には加えず、参考値として提示することにした。なお、寺社への旗竿型通路は不特定者が使用するため、図上には表示している。

下表右欄の数値は一つの路地あたりのアクセス住戸（敷地）を示している。貫通型や直角型の住戸（敷地）数は20戸前後となっており、他のタイプ（6～9戸）よりも多い。また、基盤割エリアより

表3 路地タイプ一覧

| No. | タイプ                                | 内 容                                                                                | 参考数値* <sup>1</sup><br>住戸等/路地 |
|-----|------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------|
| ①   | <small>のぼりざお</small><br>幟竿型（含む屈折型） | 一本の路地の片面に複数の住戸等が接続しているもの                                                           | 3.9<br>6.9                   |
| ②   | 糸巻型                                | 一本の路地の両面に複数の住戸等が接続しているもの                                                           | 7.7<br>9.3                   |
| ③   | T型                                 | 公道が下にあるとしてT字の縦棒がそれに接続し、横棒に複数の住戸等が接続しているもの                                          | 5.0<br>8.8                   |
| ④   | 逆L型                                | T型の変形だが、公道が下にあるとしてL字の縦棒がそれに接続し、横棒に複数の住戸等が接続しているもの                                  | 4.0<br>6.3                   |
| ⑤   | 貫通型（含む屈折型）                         | 公道から公道へ直線的に路地が貫通し、その片側または両側に住戸等が接続しているもの。または屈折して鋸（かすがい）のように同じ公道に戻り、その路地に住戸等が接続するもの | 23.0<br>9.0                  |
| ⑥   | 直角型                                | 公道から公道へ直角型に路地が貫通し、その片側または両側に住戸等が接続するもの                                             | 11.6<br>19.7                 |
| ⑩   | 参考：旗竿型                             | 公道から路地が引き込まれて、一つの住戸等に接続するもの。幟型が複数の住戸等であるのに対し、これは単数である。                             | 1.0<br>実態として最多               |

\* 1 名古屋市居住者全図（1929・1933年）をもとに、上段が基盤割エリア、下段が白川・大須エリアの1路地あたりの住戸等数である。住戸等とは住戸だけでなく、敷地（建物なし）も含む表現である。

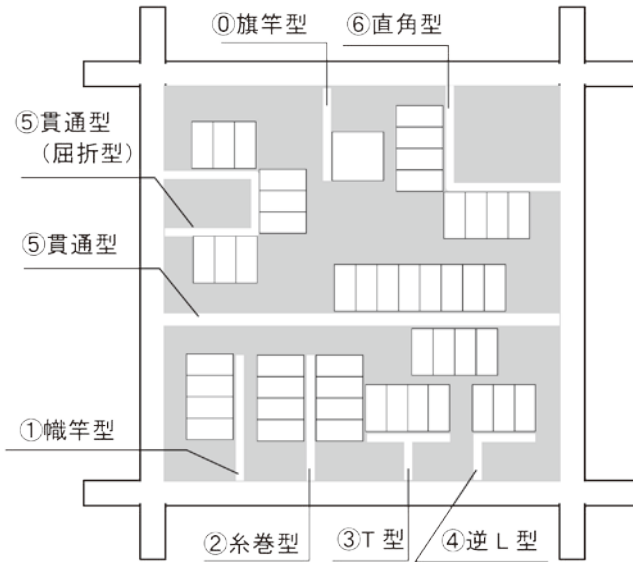


図2 路地タイプの概念図

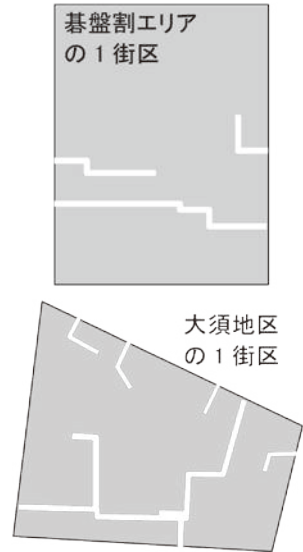


図3 路地の実態事例

も白川・大須エリアの戸数が概して多い。いくつかのタイプの複合型がよくみられる（図3）が、これは街区の形状によるところが大きい（後述する）と考えられる。

## 2-2 戦前の路地の分布実態（1922・1933年）

### （1）全体概括（分布的傾向）

調査対象地域全体の路地を表示したのが図4である。概観すると次の傾向がみられる。

- ①本町通（江戸時代のメインストリートであり、名古屋城と東海道の宮宿を結ぶ）の東西両街区の路地は非常に少なく、この本町通から遠ざかるにつれて路地数が増え、かつ形態も複雑になっている。
- ②白川・大須エリアは広小路通の近傍で碁盤割形状の街区がみられるが、それ以南は南寺町を形成しているので、寺社を囲む大街区が多く、主要街路や参道から路地が延長され、見世（商店）や仕舞屋（住宅）が拡大立地している。そのため、複雑な路地形態になっている。
- ③碁盤割エリアの貫通型（直線的）路地は2ヶ所のみであり、江戸時代に形成されたものが、戦前まで存在している。この路地を「中道」と呼び、江戸の町の新道と同様の性格をもつ。商店や住戸を受け止めるために、会所道が延長され生まれたと推察される。

### （2）全体概括（数量的傾向）

全対象エリアの路地数は316路地、住戸等数は2,375戸であった。路地あたり7.5戸である。

ちなみに①旗竿型は路地数合計より多い108%，住戸等数は14%に相当している。（表4）

#### 1）エリア別路地数・住戸等数

エリア別でみると碁盤割エリアは白川・大須エリアと比較して路地数・住戸等数とも少なく、特に



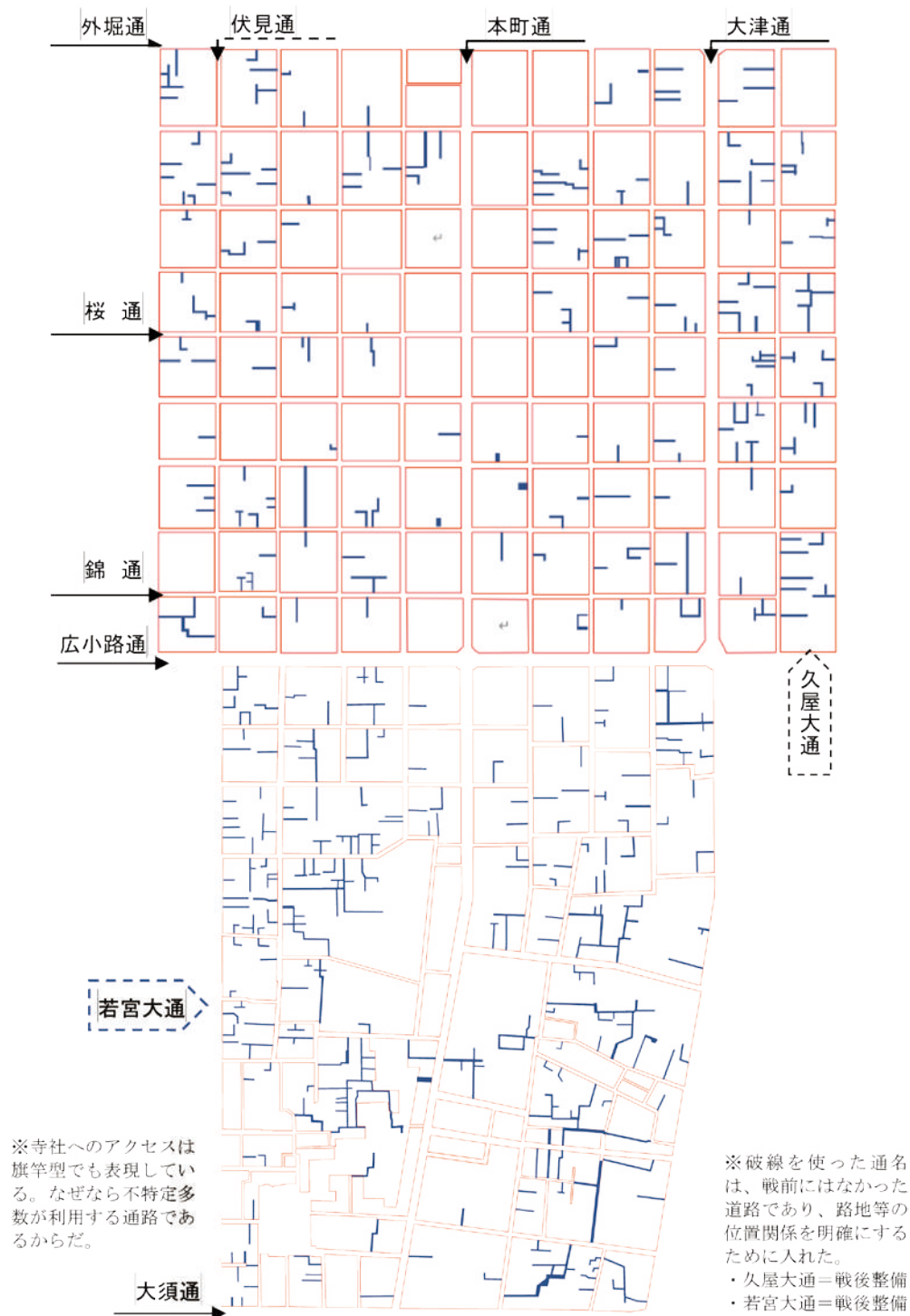


図4 調査対象エリアの路地分布（1933年）

\* 名古屋市居住者全図（1933年版＋不明部分を1929年版で補正）より

表4 戦前のエリア別タイプ別路地数および住戸等数

| エリア              | 街区  | 項目     | 路地数<br>対合計比 | 住戸等数<br>対合計比 | ①幟竿型<br>/合屈折 | ②糸巻型 | ③T型  | ④逆L型 | ⑤貫通型<br>/合屈折 | ⑥直角型 | 参考<br>⑦旗竿型 |
|------------------|-----|--------|-------------|--------------|--------------|------|------|------|--------------|------|------------|
| 碁盤割              | 78  | 路地数    | 145         |              | 53           | 30   | 22   | 30   | 5            | 5    | 212        |
|                  | 90  | 構成比    | 45.9        |              | 36.6         | 20.7 | 15.2 | 20.7 | 3.4          | 3.4  | 146.2      |
|                  |     | 住戸等数   |             | 837          | 205          | 230  | 109  | 120  | 115          | 58   | 212        |
|                  |     | 構成比    |             | 35.2         | 24.5         | 27.5 | 13.0 | 14.3 | 13.7         | 6.9  | 25.3       |
| 白川・大須<br>(広小路以南) | 45  | 路地数    | 171         |              | 46           | 30   | 18   | 46   | 11           | 20   | 129        |
|                  | 53  | 構成比    | 54.1        |              | 26.9         | 17.5 | 10.5 | 26.9 | 6.4          | 11.7 | 75.4       |
|                  |     | 住戸等数   |             | 1,538        | 318          | 279  | 159  | 289  | 99           | 394  | 129        |
|                  |     | 構成比    |             | 64.8         | 20.7         | 18.1 | 10.3 | 18.8 | 6.4          | 25.6 | 8.4        |
| 合 計              | 123 | 路地数    | 316         |              | 99           | 60   | 40   | 76   | 16           | 25   | 341        |
|                  | 143 | 構成比    | 100.0       |              | 31.3         | 19.0 | 12.7 | 24.1 | 5.1          | 7.9  | 107.9      |
|                  |     | 住戸等数   |             | 2,375        | 523          | 509  | 268  | 409  | 214          | 452  | 341        |
|                  |     | 構成比    |             | 100.0        | 22.0         | 21.4 | 11.3 | 17.2 | 9.0          | 19.0 | 14.4       |
|                  |     | 住戸等/路地 |             | 7.5          | 5.3          | 8.5  | 6.7  | 5.4  | 13.4         | 18.1 | 1.0        |

\* 街区欄の数字で、上段は路地のある街区数、下段は旗竿型を含めた街区数を示している。

住戸等数のシェアが1:2と差が大きい。理由は上記(1)②に指摘したとおり、寺町ゆえに不整形の大街区が多いため、敷地の有効利用にむけて路地を延長しながら商店や住宅を立地させている結果だと判断できる。⑦旗竿型(参考:合計に含まれない)は碁盤割エリアで顕著に多い。

## 2) タイプ別路地数・住戸等数

タイプ別でみると、路地数では①幟竿型、④逆L型、②糸巻型の順に多く、この3タイプで全体の3/4を占める。他方、住戸等数では①幟竿型、②糸巻型、⑥直角型の順に多くあり、この3タイプで2/3近くを占める。碁盤割エリアでは路地数で①幟竿型が突出し、②糸巻型、④逆L型が同数であった。

住戸等数では②糸巻型、①幟竿型の順で突出はしていない。①幟竿型も②糸巻型も路地が敷地の奥にまで伸びている形式なので、敷地が奥行の長い形状(標準的には奥行20間または15間)であるための路地延長と言える。白川・大須エリアでは路地数では①幟竿型と④逆L型が同数で多く、住戸等数では⑥直角型、①幟竿型、④逆L型の順で⑥直角型が突出している。当初からの直角型路地の場合もあるが、その複雑な形状からみると、別々の道路から発生した路地が成長し、交わってできたタイプが多いと想定される(図5)。



図5 戦前の路地の成長とネットワーク形成事例  
出典: Network2010作成図<sup>4)</sup>

## (3) ゾーン別の傾向分析

### 1) 碁盤割エリア

道路により、路地出現の頻度が異なることが全体概括で明らかになったので、本町通、大津通、久



屋大通街区の3本の南北道路，広小路通，伝馬通の2本の東西道路を取り上げる。道路の両側の街区群（南北道路ならその東西の街区群，東西道路ならその南北の街区群）をゾーンと呼ぶ。ただし，久屋大通は当時には存在しなかったので，道路に転用される街区群を対象にした。また，広小路通は碁盤割エリアの北側の街区群が対象になる。南側街区群は白川・大須エリアに含まれるが，実態傾向が異なるため，一体としなかった。（図6，表5）

【本町通】路地数も住戸数も最も少ない。詳細にみると本町通から直接アクセスする路地は1本のみ（なお旗竿型は1本のみ）であった。江戸時代から本町通は最も格式のある主要道路であり，面する敷地幅が広いほど商家として評価されるので，路地は生じ難いのではと推察される。

【大津通】大津通は1908（明治41）年に栄町から熱田町を結ぶ13間（23.4m）幅員で，延長距離8.8kmの道路として整備され，南北のメインストリートとして本町通に取って代わっていった。そのため商店や住宅の集積が進んだため，最も多い路地空間が出現していったと想定される。ここには碁盤割を南北に貫く中道が1本ある。江戸時代からあるこの中道には24戸の住戸や店舗が接している。（図7，8）

【久屋大通】関鍛冶通と久屋通に挟まれた街区である。ここも大津通と同様の傾向を示し，街区数を勘案すると路地空間の出現数は大津通同程度の多さになっている。

【伝馬通】江戸時代は伝馬が置かれ，本町との交差点には高札場となっていた。広小路通が転用される前は東西のメインストリートであった。この通りの上下の街区群をみると，大津通以東の街区で路地が数多くみられ，以西は少なく，かつ伝馬通に面した路地は皆無であった。本町通と同様の理由から少ないと考えられる。

【広小路通（北）】ここは東西のメインストリートであり，早くから近代ビルが建ち並んだ。本町通まではいかないが，ここでも路地数は少なく，広小路通に面した路地は皆無である。ただし①旗竿型は4本ある。

## 2) 白川・大須エリア

【広小路通（南）】碁盤割エリアから外れたこの街区群は，北側とは対照的に路地が多く，広小路通に面した路地も5ヶ所が出現している。また本町通に面した2街区を除いた他の6街区はすべて武家地であり，そこでの路地数が多いことがわかる。武家地は1

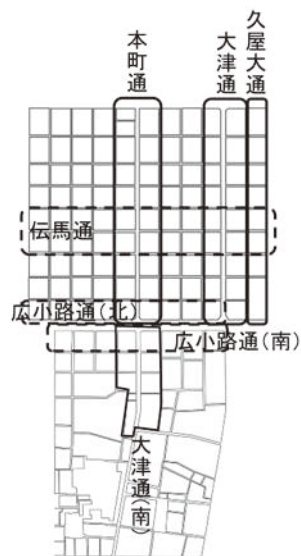


図6 分析対象の通り（ゾーン）



図7 大津通沿いの中道  
出典：Network2010作成図



図8 もう一つの中道  
出典：Network2010作成図

表5 対象エリアの通別路地数・住戸数

| エリア   | 通り名       | 方向軸 | 街区数 | 路地数 | 住戸数 | 住戸等/街路 |
|-------|-----------|-----|-----|-----|-----|--------|
|       | 本町通（東西両側） | 南北軸 | 19  | 5   | 29  | 5.8    |
|       | 大津通（東西両側） | 南北軸 | 18  | 43  | 227 | 5.3    |
| 碁盤割   | 久屋大通（南北群） | 南北軸 | 8   | 23  | 122 | 5.3    |
|       | 伝馬通（南北両側） | 東西軸 | 22  | 29  | 122 | 4.4    |
|       | 広小路通（北側）  | 東西軸 | 9   | 8   | 85  | 10.6   |
| 白川・大須 | 広小路通（南側）  | 東西軸 | 8   | 20  | 126 | 6.3    |
|       | 本町通（東西両側） | 南北軸 | 9   | 13  | 90  | 3.5    |

敷地の規模が大きく、敷地を有効活用するためには、路地を張り巡らさざるを得ない。

【本町通（南）】碁盤割以南であっても、名古屋城から宮宿までの主要道路のため、格式は保たれており、路地は圧倒的に少なく、対象ゾーンでは本町通に面しての路地は皆無であった。なお寺町のある地区では本町通であっても路地は散見される。

### 2-3 路地形成と敷地条件

筆（地籍）の形状や街区条件が路地形成にどのような影響を及ぼしているのかを調査した。

調査方法は先述の名古屋市居住者全図（住宅地図）と碁盤割エリアの復興土地区画整理換地図（施行前一中一工区）および白川エリアの復興土地区画整理換地図（施行前一中二工区）を重ね合わせることによって明らかにした。ただし、名古屋市居住者全図（住宅地図）における居住者名や空家・物置等の利用実態の精度は高いが、間口・奥行の長さや面積・形状については今日の精度はない。よって、路地の位置関係から敷地形状を類推している。

検討モデルとして、碁盤割エリアから①路地が非常に多いタイプA（大津通沿い街区と久屋大通街区）、②中道のあるタイプB、③路地のないタイプC（本町通両サイド街区）、白川エリアから④寺町特有の面積の大きい街区のタイプDの4タイプを取り上げた。それぞれの位置関係は図9に示す。



図9 検討タイプの位置

#### (1) タイプA（路地が多い街区群）

街区条件をみると、一つは戦前の南北のメインストリートである大津通に面し（A-Lと略す）、もう一つはそれと東に隣接して、戦後は久屋大通の用地（同A-R）となる街区である。A-L街区の中央部に寺院が配置され、そこへアクセスするため4本の路地が配されている。大津通からアクセスする

2本の路地は奥行が20間（約40m）あるので（図10）、奥を有効に活用するために、②糸巻型または①幟竿型となっている。鍛冶屋町通に接する路地は1本のみである。ここでは奥行のある筆を縦長に分割する敷地が目立つ。他方A-R街区は中央にあった会所部分を宅地として利用するため、路地網が整備されている。もう一つの路地は①幟竿型であった。また、この街区も敷地の間口分割による細分化が進んでいる。（図11）

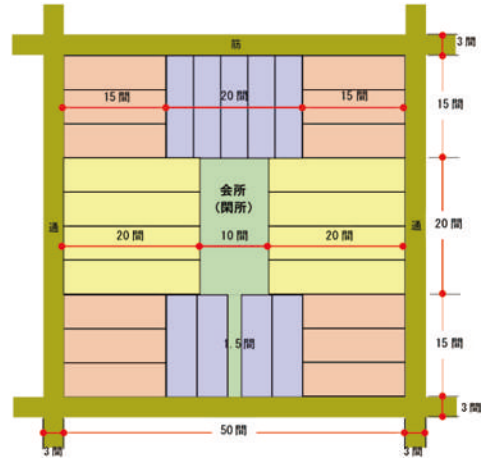


図10 標準的な碁盤割街区の敷地割  
出典：参考文献【6】 p. 32 より

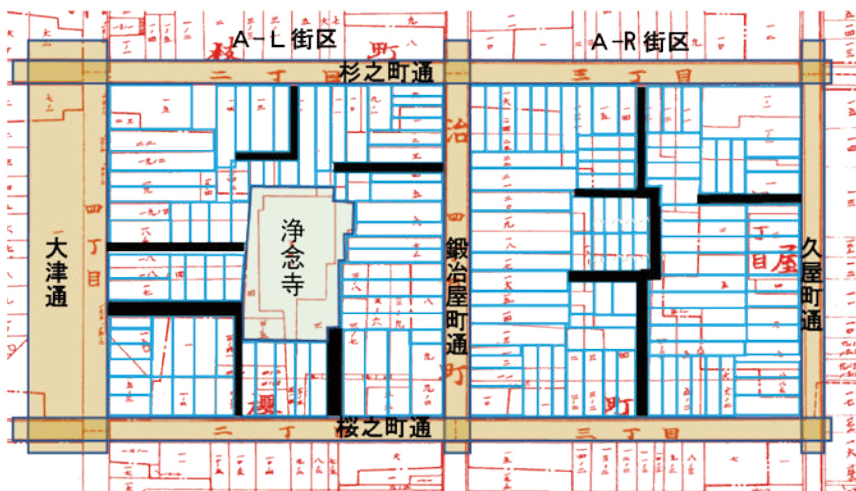


図11 路地形成と敷地条件-タイプA

## (2) タイプB（中道のある街区等）

街区条件をみると、南北のメインストリートである大津通に接し、中道を有する街区（B-U）、大津通と東西のメインストリートである広小路通の両方に接する街区（B-D）となっている。明治期に整備された大津通はもとの道路の西側が拡幅されたため、当該2街区は敷地が削られ、方格子状でなくなっている。しかもB-D街区は江戸期に整備された広小路通によっても街区が削られ、より小さい街区となった。（図12）

B-U街区のほぼ中央部を中道が南北に貫通しているため、外周道路に接する敷地以外はこの中道に接道している。もう一つの路地は旗竿型で寺院へのアクセス通路となっている。

B-D街区では⑤貫通型（屈折型）があり，会所と思われる宅地を有効活用するため，整備されたと推察される。なお伊勢町通からは2本の⑩旗竿型通路がある。

大津通沿いの敷地は奥行が浅く，中道や⑤貫通型（屈折型）の路地があるため，大津通から行き来する路地はない。広小路通もそこからアクセスする路地はない。

### (3) タイプC（路地のない街区群）

街区条件をみると，南北の格式あるメインストリート本町通に二つの街区が東西で接している。これまでみてきた街区と比較して筆規模が大きく，筆の再分割（間口割や奥行割）は少ない。よって路地は⑩旗竿型1本を除いて，皆無である。本町通沿いの敷地規模は同じ街区内の他の筆と比べても間口が広いが，本町通に面しない筆の規模は小さくなっている。本町通には格式ある大商家が並んでいた。二つの街区中央に会所空間を含んだ寺院が大きな空間を占めている。特にC-R街区には二つの寺院が街区の大きな空間を占めている。（図13）

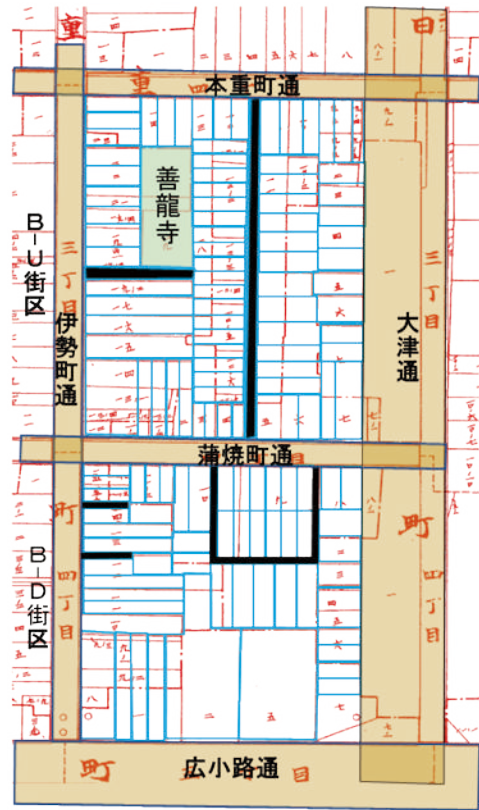


図12 路地形成と敷地条件-タイプB

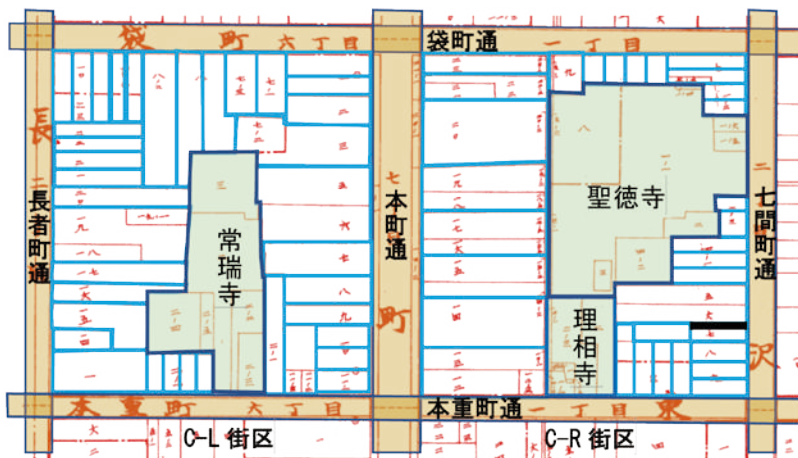


図13 路地形成と敷地条件-タイプC



## (4) タイプD（非碁盤割で寺町の街区）

街区条件をみると、碁盤割の街区と違って変形街区になっている。東境界線に南大津通が南北に走る。幕末期の地図<sup>5)</sup>を参考にすると、当該街区は主に白林寺の境内が大部分を占め、一部に勝鬘寺の法話所があり、残りが武家地と町人地である（図14 白色は町人地）。

江戸時代の道路は、大津町下通（地図上では南大津通）と白林寺西側の南北の道路しかなかったので、白林寺への参道は西道路から、それ以外のアクセスは大津町下通からであった。明治以降に東西の道路が整備されて、白林寺の境内は路地のネットワークが形成されていって、旧武家地での地籍は間口が大きいものの敷地利用にあたっては細分化されている。

碁盤割街区（図10参照）のように当初よりしっかりと敷地割ができていない寺町では、まずは既存の道路沿いに面して土地利用がなされる。次に新規の道路が整備されるにつれ、同様に沿道の土地利用がなされるが、奥行の長い筆は、路地を奥に伸ばして、その両側を細かく敷地割をして住宅・店舗を配置する。その結果、図15のように路地が多くなっている。



図14 幕末期の土地利用区分/タイプD

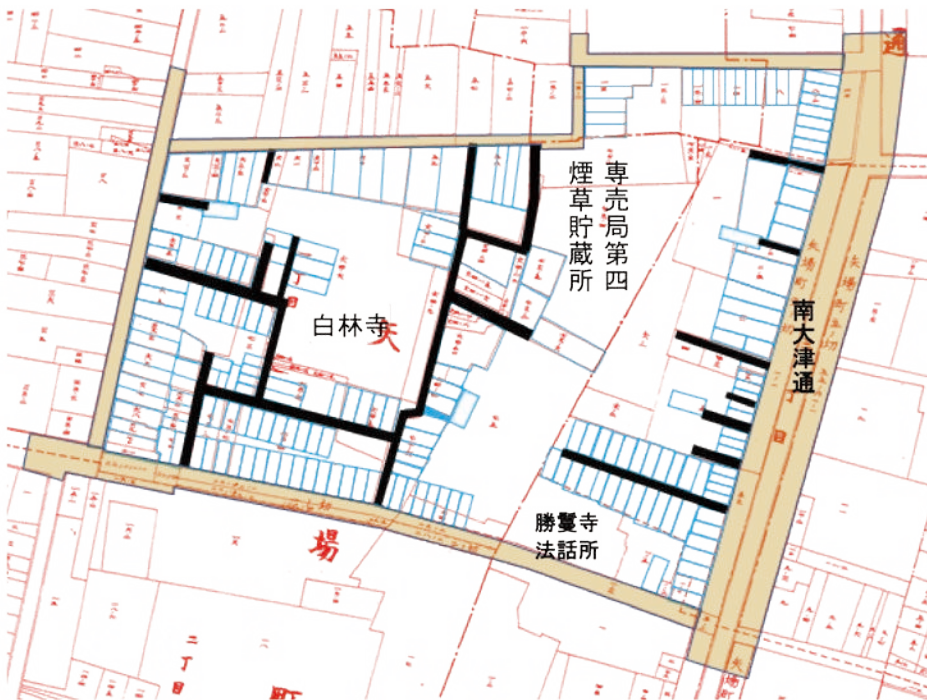


図15 路地形成と敷地条件-タイプD

### 3 戦後の路地分布の変遷（1955年・1975年・1996年）

#### 3-1 戦後の路地の変遷

##### （1）戦前からの戦後にかけての数量的変化

戦前の路地のある街区数123街区、路地数316路地、住戸等数2,375戸に比較して、戦後は極端に少なくなっている。これは復興土地区画整理事業（復興事業と略す）によって、幅員の狭い道路は拡張され、不整形な街区や筆が整形され、さらに小規模宅地が整理された。復興事業計画の基本方針は、規模が30坪（約100㎡）以上、間口が3間（約5.4m）以上の宅地を確保することを最低条件としている。その結果、戦前の数値を基準とすると、戦後1955年の路地のある街区数は22.8％、路地数は12.0％、住戸等数は16.4％というように、3種の数値は1～2割まで大幅に減少している。それだけ、復興事業の影響は大きいと言える。（表6）

表6 戦前から戦後の路地・住戸等数の変化

| エリア              | 街区  | 項目   | 路地数<br>対合計比 | 住戸等数<br>対合計比 | ①幟竿型<br>/含屈折 | ②糸巻型 | ③T型 | ④逆L型 | ⑤貫通型<br>/含屈折 | ⑥直角型 | 参考<br>⑦旗竿型 |
|------------------|-----|------|-------------|--------------|--------------|------|-----|------|--------------|------|------------|
| 1933年<br>(昭和8年)  | 123 | 路地数  | 316         |              | 99           | 60   | 40  | 76   | 16           | 25   | 341        |
|                  | 143 | 住戸等数 |             | 2,375        | 523          | 509  | 268 | 409  | 214          | 452  | 341        |
| 1955年<br>(昭和30年) | 28  | 路地数  | 38          |              | 4            | 10   | 2   | 2    | 15           | 5    | 24         |
|                  | 50  | 住戸等数 |             | 389          | 16           | 94   | 3   | 12   | 187          | 77   | 24         |
| 1975年<br>(昭和50年) | 38  | 路地数  | 44          |              | 14           | 8    | 4   | 2    | 9            | 7    | 59         |
|                  | 78  | 住戸等数 |             | 312          | 55           | 43   | 8   | 5    | 124          | 77   | 59         |
| 1996年<br>(平成8年)  | 20  | 路地数  | 22          |              | 4            | 3    | 0   | 2    | 9            | 4    | 23         |
|                  | 37  | 住戸等数 |             | 182          | 18           | 13   | 0   | 6    | 118          | 27   | 23         |

\* 街区欄の数字で、上段は路地のある街区数、下段は旗竿型を含めた街区数を示している。

戦前・戦後の路地形状の変化からみると、④逆L型（残存率2.6％）、①幟竿型（同4.0％）、③T型（同5.0％）の大幅な減少が目につく。逆に路地残存率が高いのが⑤貫通型/含屈折型（93.8％）、⑥直角型（20.0％）、②糸巻型（16.7％）であった。街区や筆の整形が路地の生成を抑えている。ちなみに、路地としてカウントしていない⑦旗竿型は7.0％の残存率であり、裏宅地の解消も復興事業の効果であると言える。（図16、17）

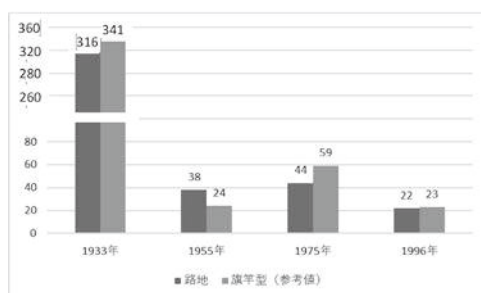


図16 戦前から戦後の路地数等の推移

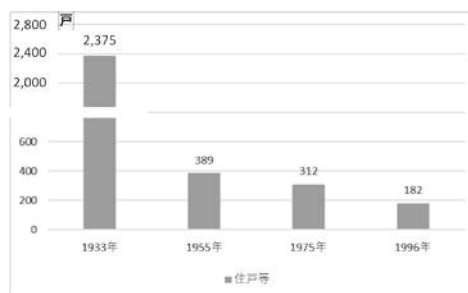


図17 戦前から戦後の路地住戸等数の推移



## (2) 戦後の数量的変化

戦後の推移を3時点で見ると、路地数は増加→減少となり、戦後の1955年から1996年の約40年間で路地数は57.9%となっている。他方、住戸等数は増加することなく、減少の一途をたどり、約40年間で46.7%と半減以下になっている。なお、その間の路地あたりの住戸等数は10.2戸から8.3戸へと減少しているが、路地数や住戸等数の減少変化に比べて緩慢である。つまり住戸等数の少ない小規模な路地が減少し、住戸等数の多い大規模な路地が存続していることを意味している。

戦後の路地をタイプ別にみると、⑤貫通型/含屈折型は戦前からの残存率が高く、このタイプが路地数、住戸等数とも最も多くなっている。それに次いで、②糸巻型、⑥直角型の路地数、住戸等数が多い。経年的にみると①幟竿型が1955年から1975年にかけて、約3.5倍に増加し、1996年では減少して、1955年と同様の数値となっている。そのほかでは③T型、⑥直角型の双方で同様の期間が増えている。路地タイプ別推移を図18に示した。

参考のため、参考文献7（三浦他2015）で示された「中区の路地数」<sup>6)</sup>の1965年から2013年まで、ほぼ10年間隔で示されたデータがある（図19）。これによると1965年から1985年までは緩やかに路地は減少するが、1985年～1995年で大きく減少し、以降は緩やかに着実に減少している。1985年～1995年の激減の要因は不明だが、1990年がバブル経済崩壊の年であり、その前後で地価の高騰・下落が起こることで、地上げとその土地の整理が行われたと推察される。

以上の推移を勘案すると、1955年～1973年にかけての高度経済成長時代に、土地の高度化（ビル化）と同時に土地の細分化（路地化・分割）による高度利用が進み、1973年と1978年の2度にわたるオイルショックで日本経済は停滞するものの、1986年～1990年までのバブル経済によって息を吹き返し、地価の高騰と地上げとビル建設が進むことで、路地は少なくなっていった。

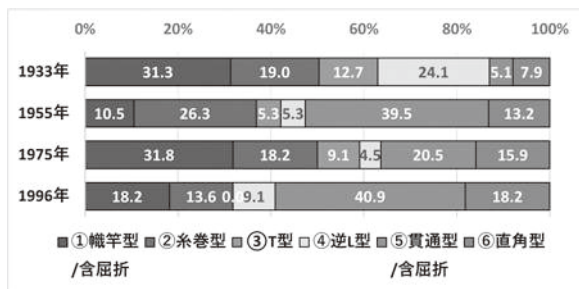
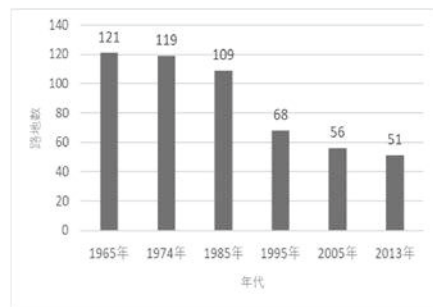


図18 戦前から戦後のタイプ別路地数の推移

図19 別途調査<sup>6)</sup>による路地数の推移

## (3) 路地と人口密度との関係

戦前の中区<sup>7)</sup>の人口密度は240人/haと戦後と比較して突出して高い。この数値は江戸期の町人地の人口密度231人/haを超える値となっている。

戦後は疎開や戦災によって中区人口は戦前の18.7万人から1947（昭和22）年の6.0万人へと大きく減少した。その後人口が回復していったが、1960（昭和35）年の11.4万人をピークに減少を続け

ていった。1995（平成7）年に6.3万人で底を打ち、直近まで人口は9.3万人まで増加してきている。昼間人口は統計が取られた1965（昭和40）年から増加し、1995（平成7）年に34万人でピークを迎えて減少してきたが、最近再び増加する兆しをみせている。

人口密度もほぼ同様の傾向にあるが、区域面積に変動があるため、若干異なった動きを示している。世帯密度は戦後一貫して増加しているが、1世帯あたり人員は1955（昭和30）年以降5.0人から1.5人へと大幅に減少している。（図20）

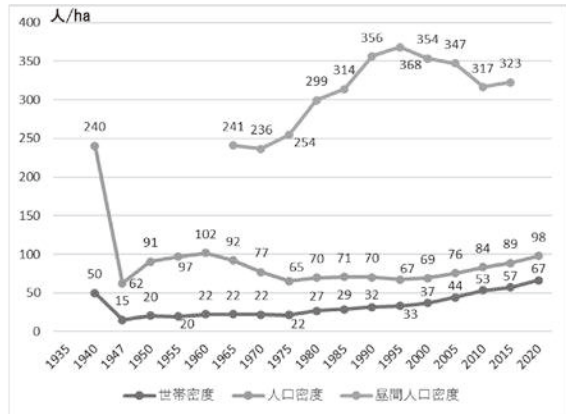


図20 中区の人口・世帯数・昼間人口の密度推移  
資料：国勢調査各年版

路地や路地に接する宅地等数との関係をみると、戦前の低層高密型の市街地に路地が数多く発生した。戦後になると人口回復に昼間人口の増加（＝就業者の増加）が加わり、人口減少以上に昼間人口が増加していったので、復興事業により筆が整理された街区で受け止められた。その際、終戦直後は木造建築が密集しながら復興が進んでいったが、年月を経るに従い、それらの建物はRCによる高層高密度化への建替えが進み、戦後に生じた路地もどんどん消滅していったと考えられる<sup>8)</sup>。

### 3-2 戦後のエリア別の路地数・住戸等数の推移（表7、図21）

#### （1）碁盤割エリア

【数量的把握】このエリアは戦前からの推移を把握できる。全体エリアでも指摘しているが、復興事業により大きく路地数も住戸等数も減少させている。1955年は戦前の7.6％、7.7％とほぼ同一比率で残存している。タイプ別では特に①幟竿型/含屈折、④逆L型、③T型での減少が目立つ。

戦後の3時点の推移をみると、1975年で路地数、住戸等数ともに増やし、特に路地数は倍増させている。1996年には1975年比で20％前後程度にまで大幅に減少した。タイプ別では①幟竿型/含屈折が1955年には皆無だったが、1975年に突如8ヶ所で現れている。しかし、このタイプは路地にぶら下がる住戸等は平均2.5戸と少なく、③T型や④逆L型も同様の数値を示している。②糸巻型は1路地あたり8戸から5戸に減らしているが、①幟竿型/含屈折よりも多い。

【空間的把握】1975年に路地が増加した場所は、本町通以東で桜通界限に発生している。1955年以降に日本は高度経済成長期に突入し、1975年時点ではビルが建設される前に路地による土地の細分化による高度利用が進んでいったと考えられる。1996年になると、路地は極端に少なくなる。なお、土地の高度利用例としては、旗竿敷地に1棟のマンションが建っている事例が2ヶ所あり、それぞれ28戸、50戸の住戸を数える。この通路を使って、複数の住戸の人々が行き来するものの、1敷地1棟扱いにして、⑩旗竿型として扱った。図面では例外的に表示している。

都市魅力と“消毒”都市 その2

表7 エリア別タイプ別路地数および住戸等数の推移

| 基盤割エリア   |    |      |     |       |              |      |     |      |              |      |            |
|----------|----|------|-----|-------|--------------|------|-----|------|--------------|------|------------|
| エリア      | 街区 | 項目   | 路地数 | 住戸等数  | ①織竿型<br>/含屈折 | ②糸巻型 | ③T型 | ④逆L型 | ⑤貫通型<br>/含屈折 | ⑥直角型 | 参考<br>⑦旗竿型 |
| 1933年    | 78 | 路地数  | 145 |       | 53           | 30   | 22  | 30   | 5            | 5    | 212        |
| (昭和8年)   | 90 | 住戸等数 |     | 837   | 205          | 230  | 109 | 120  | 115          | 58   | 212        |
| 1955年    | 9  | 路地数  | 11  |       | 0            | 6    | 2   | 1    | 1            | 1    | 19         |
| (昭和30年)  | 28 | 住戸等数 |     | 64    | 0            | 47   | 3   | 5    | 6            | 3    | 19         |
| 1975年    | 20 | 路地数  | 22  |       | 8            | 7    | 3   | 2    | 1            | 1    | 31         |
| (昭和50年)  | 44 | 住戸等数 |     | 77    | 20           | 35   | 6   | 5    | 5            | 6    | 31         |
| 1996年    | 7  | 路地数  | 5   |       | 2            | 2    | 0   | 1    | 0            | 0    | 18         |
| (平成8年)   | 19 | 住戸等数 |     | 13    | 4            | 5    | 0   | 4    | 0            | 0    | 18         |
| 白川・大須エリア |    |      |     |       |              |      |     |      |              |      |            |
| エリア      | 街区 | 項目   | 路地数 | 住戸等数  | ①織竿型<br>/含屈折 | ②糸巻型 | ③T型 | ④逆L型 | ⑤貫通型<br>/含屈折 | ⑥直角型 | 参考<br>⑦旗竿型 |
| 1933年    | 45 | 路地数  | 171 |       | 46           | 30   | 18  | 46   | 11           | 20   | 129        |
| (昭和8年)   | 53 | 住戸等数 |     | 1,538 | 318          | 279  | 159 | 289  | 99           | 394  | 129        |
| 1955年    | 19 | 路地数  | 27  |       | 4            | 4    | 0   | 1    | 14           | 4    | 5          |
| (昭和30年)  | 22 | 住戸等数 |     | 325   | 16           | 47   | 0   | 7    | 181          | 74   | 5          |
| 1975年    | 18 | 路地数  | 22  |       | 6            | 1    | 1   | 0    | 8            | 6    | 28         |
| (昭和50年)  | 34 | 住戸等数 |     | 235   | 35           | 8    | 2   | 0    | 119          | 71   | 28         |
| 1996年    | 13 | 路地数  | 17  |       | 2            | 1    | 0   | 1    | 9            | 4    | 5          |
| (平成8年)   | 18 | 住戸等数 |     | 169   | 14           | 8    | 0   | 2    | 118          | 27   | 5          |
| 白川エリア    |    |      |     |       |              |      |     |      |              |      |            |
| エリア      | 街区 | 項目   | 路地数 | 住戸等数  | ①織竿型<br>/含屈折 | ②糸巻型 | ③T型 | ④逆L型 | ⑤貫通型<br>/含屈折 | ⑥直角型 | 参考<br>⑦旗竿型 |
| 1955年    | 9  | 路地数  | 14  |       | 2            | 3    | 0   | 1    | 5            | 3    | 5          |
| (昭和30年)  | 12 | 住戸等数 |     | 201   | 12           | 28   | 0   | 7    | 86           | 68   | 5          |
| 1975年    | 9  | 路地数  | 10  |       | 1            | 0    | 0   | 0    | 4            | 5    | 18         |
| (昭和50年)  | 19 | 住戸等数 |     | 133   | 7            | 0    | 0   | 0    | 59           | 67   | 18         |
| 1996年    | 6  | 路地数  | 8   |       | 0            | 0    | 0   | 1    | 4            | 3    | 2          |
| (平成8年)   | 9  | 住戸等数 |     | 80    | 0            | 0    | 0   | 2    | 56           | 22   | 2          |
| 大須エリア    |    |      |     |       |              |      |     |      |              |      |            |
| エリア      | 街区 | 項目   | 路地数 | 住戸等数  | ①織竿型<br>/含屈折 | ②糸巻型 | ③T型 | ④逆L型 | ⑤貫通型<br>/含屈折 | ⑥直角型 | 参考<br>⑦旗竿型 |
| 1955年    | 10 | 路地数  | 13  |       | 2            | 1    | 0   | 0    | 9            | 1    | 0          |
| (昭和30年)  | 10 | 住戸等数 |     | 124   | 4            | 19   | 0   | 0    | 95           | 6    | 0          |
| 1975年    | 9  | 路地数  | 12  |       | 5            | 1    | 1   | 0    | 4            | 1    | 10         |
| (昭和50年)  | 15 | 住戸等数 |     | 102   | 28           | 8    | 2   | 0    | 60           | 4    | 10         |
| 1996年    | 7  | 路地数  | 9   |       | 2            | 1    | 0   | 0    | 5            | 1    | 3          |
| (平成8年)   | 9  | 住戸等数 |     | 89    | 14           | 8    | 0   | 0    | 62           | 5    | 3          |

\* 街区数は、上段は路地がある街区数、下段は旗竿型の宅地がある街区を含めた街区数



図21 基盤割・白川・大須エリア別路地分布 (1955年, 1975年, 1996年 参考：2017年)



## (2) 白川・大須エリア

【数量的把握】このエリアの括りでは戦前からの推移を把握できる。ここでも碁盤割エリアと同様に、復興事業によって大きく路地数も住戸等数も減少させている。1955年は戦前の15.8％、21.1％の割合で残存している。碁盤割エリアと比較すれば、残存率は高く、2～3倍の開きがある。タイプ別では特に③T型、④逆L型、①幟竿型/含屈折での減少が目立つ。⑤貫通型/含屈折は逆に路地数、住戸等数ともに増加しているのは注目される。

戦後の3時点の推移をみると、年々路地数、住戸等数ともに減少していった。ただし、タイプ別では①幟竿型/含屈折と⑥直角型は1955年から1975年にかけて路地数を増やし、前者は住戸等数を倍増させている。1996年時点の路地数と住戸等数が多いタイプは⑤貫通型/含屈折で9路地、118住戸等数にのぼる。詳細は個別エリアで述べる。

【空間的把握】下記の白川エリア・大須エリアを参照

## (3) 白川エリア

【数量的把握】戦後の推移は路地数、住戸等数とも減少を続けてきた。1955年から1996年の約40年で路地は57.1％、住戸等数は39.8％へと減少している。タイプ別では6タイプのうち1955年の5タイプが1996年の3タイプに減少している。ただし、残されたタイプのうち⑤貫通型/含屈折と⑥直角型は1路地あたりの住戸等数は14戸、7戸と規模の大きいものが残っている。

【空間的把握】1955年にはエリア西端に在日米軍の家族住宅、いわゆるアメリカ村<sup>9)</sup>が立地していた。路地のある街区は広小路通に接する4街区とその南隣接の2街区である。合計6街区のうち西端の1街区を除いて、幕末期は武家地であった場所である。焦土から木造の飲食やサービスの店舗が路地沿いに密集立地しており、そこから戦後がスタートした。もう一つの群である東南の2街区は寺町の一角にあり、白林寺の境内地活用および宅地有効活用のために貫通型路地が走っている。後者は白林寺の参道のようにみえるが、そうではない。戦前の土地所有は別であった。時間の経過とともに路地数を減少させているが、1996年でも残るべき路地は残っている。

## (4) 大須エリア

【数量的把握】時間経過とともに街路数、住戸等数が減少しているが、他のエリアと比較して緩やかである。3時点のうち中間点(1975年)で①幟竿旗/含屈折が路地数、住戸等数ともに増加している。また参考値であるが、⑩旗竿型も皆無から10戸に急増している。⑤貫通型/含屈折は減少→増加のなかで、住戸等数は大きく減らしてはいない。

【空間的把握】江戸期からの寺町であった大須エリアは、復興事業で大幅に都市基盤が整備されて、境内地内に張り巡らされた路地も整理された。その結果、戦後の路地は商業ゾーンとして商店が集積していく過程で路地が発生していった。この路地が商業集積に多様性をもたらしている。路地が解消されてビルが建つプロセスは少なく、個性的な路地型商業空間として存続している。



### 3-3 復興土地区画整理事業換地モデル地区における地籍変化と現状建築物との関係性

前章2-3で4つのモデル街区群を取り上げ（具体的な位置は図9を参照）、戦前の地籍と戦前土地利用（路地と住戸割）について関連性を考察した。本節においては復興事業の換地前と換地後の地籍の変化（ここでは筆の形状）を把握することで、どのように路地が解消されていったのか、また直近の都市計画基本図と比較することで、各筆と建物利用・土地利用とがどのような関係性になっているのかを把握するものである。

活用した資料は、表2の②復興土地区画整理換地図（施行前）と④換地図（施行後）に2015-2016年調査の都市計画基本図である。

#### (1) タイプA（路地が多い街区群）

対象とした二つの街区のうち、A-R街区はすべて久屋大通（公園）として利用され、宅地は存在しない。よってこの街区の路地はすべて消滅している。他方、A-L街区は、道路拡幅によって各筆の宅地面積は減少するが、宅地形状は整形され、すべての筆が公道に面するようになった。この街区でも路地は一掃され、消滅している。（図22）

建物利用・土地利用については、中央部に寺院が配置されていることは変わりがなく、ほとんどの宅地でビルが建設されている。街区南東の宅地は、従前はガソリンスタンド（図では駐車場）であるが、現時点では1棟の商業施設となっている。特に広幅員道路、ここでは西に大津通（幅員40m）、東に久屋大通（112m）、南に桜通（50m）が囲んでいるため、複数の筆にまたがって大規模ビルが建設されている。北側を走る杉之町通は、幅員15mと他の取り囲む道路と比較して狭いため、ほぼ筆割の通りの建物利用になっている。筆形状が建物形状になっている。

#### (2) タイプB（中道のある街区等）

対象とした二つの街区とも復興事業のため、周辺の道路が拡幅されるに伴い街区面積は大きく減少している。B-U街区にあった南北に貫く中道や寺院は、復興事業後には消滅している。よって路地は皆無となった。換地前からあった中道と並行して南北に貫く筆が換地後も存在している。B-D街区は換地前から規模の大きい筆があり、換地後も踏襲している。すべての筆が道路に面し、ここでも路地は一掃された。（図24）

建物利用・土地利用については、街区群東に大津通（幅員40m）、南に広小路通（40m）、街区群西に伊勢町通（15m）、北に本重町通（15m）が囲み、二つの街区の中央に錦通（37m）が東西に走る。3つの面が広幅員道路に面するB-D街区は複数の筆をまたがって大規模娯楽ビルが建設されているが、二つの面が15m道路に接する筆は、その形状に沿った間口の狭い建物が建設されている。

とりわけ注目されるのは、B-U街区の南北を貫く一筆では細長く2棟のビル（4階建と8階建）が建設され、ビル内に通路を設けて、錦通と本重町通をつないでいる。まさに中道の遺伝子を受け継いだ通路となっており、1階部分に飲食店が並び、中二階を設けて座席数を増やした商業空間となっている<sup>12)</sup>。ここは“のれん街”と呼ばれており、ビル内部に設けられた現代版の路地（幅1.8m程度）とでも呼ぶべきものとなっている。（写真1）



写真1 街区の南北を貫くビル内路地をもつ“のれん街”  
左：夜景南概観，中：北概観，右：屋内路地の様子

### (3) タイプC（路地がない街区群）

本町通を挟んだ東西の二つの街区は北側で袋町通，南側で本重町通に接している。戦前はメインストリート本町通の幅5間（9.8m），それ以外の街路は幅3間（5.9m）と道路面積は少なかった。また2-3（3）で述べたように，本町通に面した筆は間口が広く，またそれぞれの街区に寺院が存在していた。復興事業により，幅員20m（本町通と袋町通）または15m（本重町通，七間町通，長者町通）に拡幅されたが，30mを超える広幅員道路がないため，従前の街区が道路として大きく削り取られておらず，換地後の筆形状は，それ整えるための合筆はあるものの，換地前と相似しており，縮小しながらも，ほぼ同位置で存在している。いくつかの例外はあるものの，それぞれの筆にビルが建設されており，本町通は大規模ビルの建設が進み，それ以外は筆の間口に合わせて，ビルが建設されている。戦前にあった旗竿宅地はなくなっている。（図23）

建物利用・土地利用については，C-R街区での二つ寺院はなくなり，かわってホテルとオフィスビルが建設されている。筆を合わせることで敷地規模を拡大している。C-L街区は寺院が規模を縮小しながらも従前の位置で存続している。一つのビルと一つの駐車場は複数の筆を敷地として土地利用されているが，それを除いて一筆に一棟の建物として利用されている。

### (4) タイプD（非碁盤割で寺町の街区）

復興事業の換地前の地籍と土地利用の関係は2-3（4）で述べているが，寺町ゆえに街区形状は変形しており，概ね筆の規模は大きく，それゆえ土地の有効利用のために，時間経過とともに路地が延長されて，複雑かつ小規模な建物利用になっている。東側を南北に大津通が走り，戦前では本町通以上の集客力のあるメインストリートであったため，間口の狭い小規模店舗が並んでいた。（図25）

復興事業の換地後は道路が拡幅され，矢場公園も整備されている。一つの変形街区が4つの整形街区に分割されている。筆の形状も換地前と同様に規模が大きいゆえ，その規模を活かしたビルが建設されている。戦後，料亭であった場所も商業ビルに建てかわっており，その経緯で路地が消滅してい

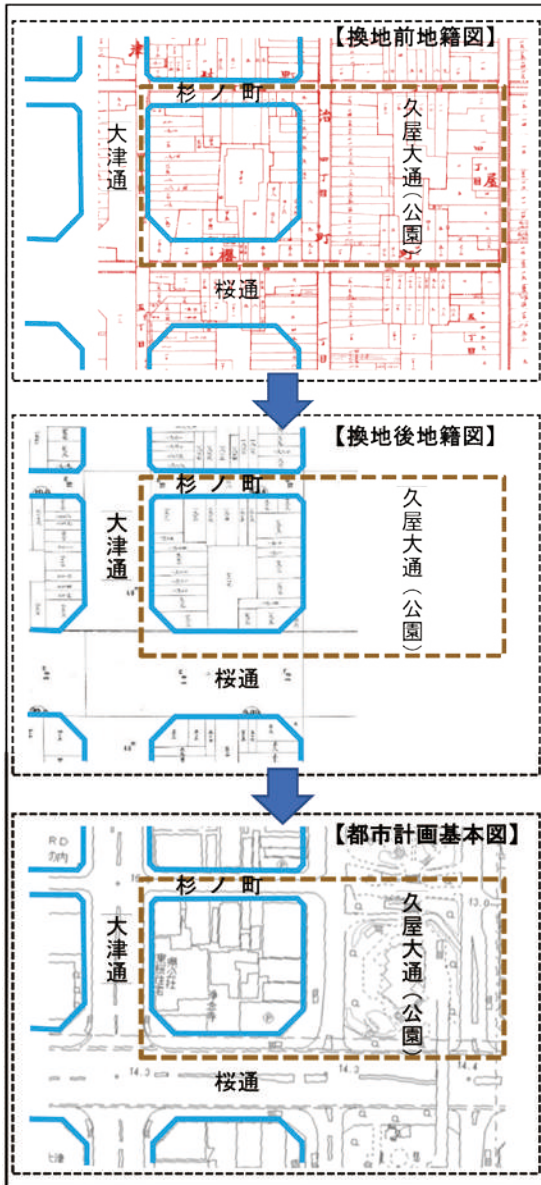


図22 碁盤割ゾーン・タイプA  
(路地が多い街区群)

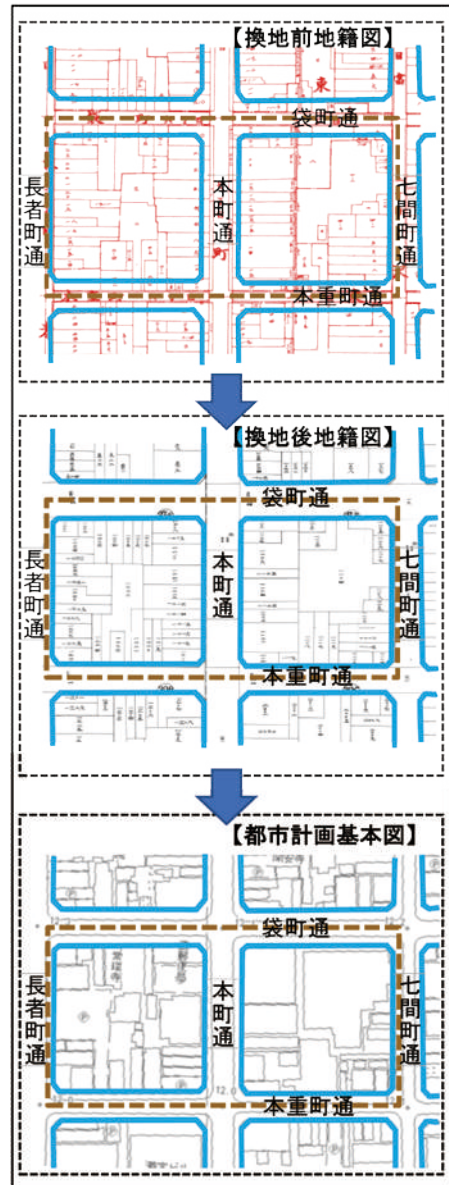


図23 碁盤割ゾーン・タイプC  
(路地がない街区群)

\* 文中に出てくるA～Dはタイプ、R&Lは右と左、U&Dは上と下という意味である。図11～13を参照のこと。



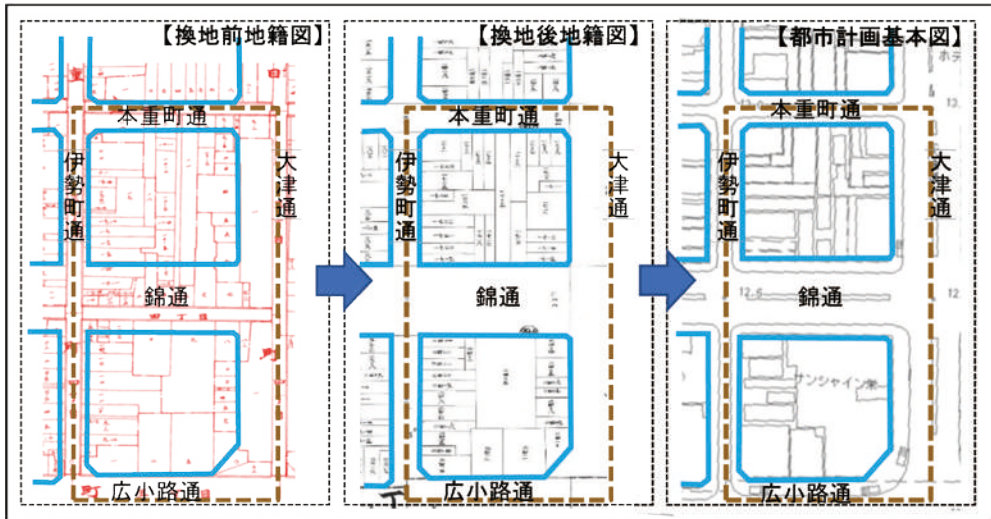


図24 碁盤割ゾーン・タイプB（中道のある街区群）

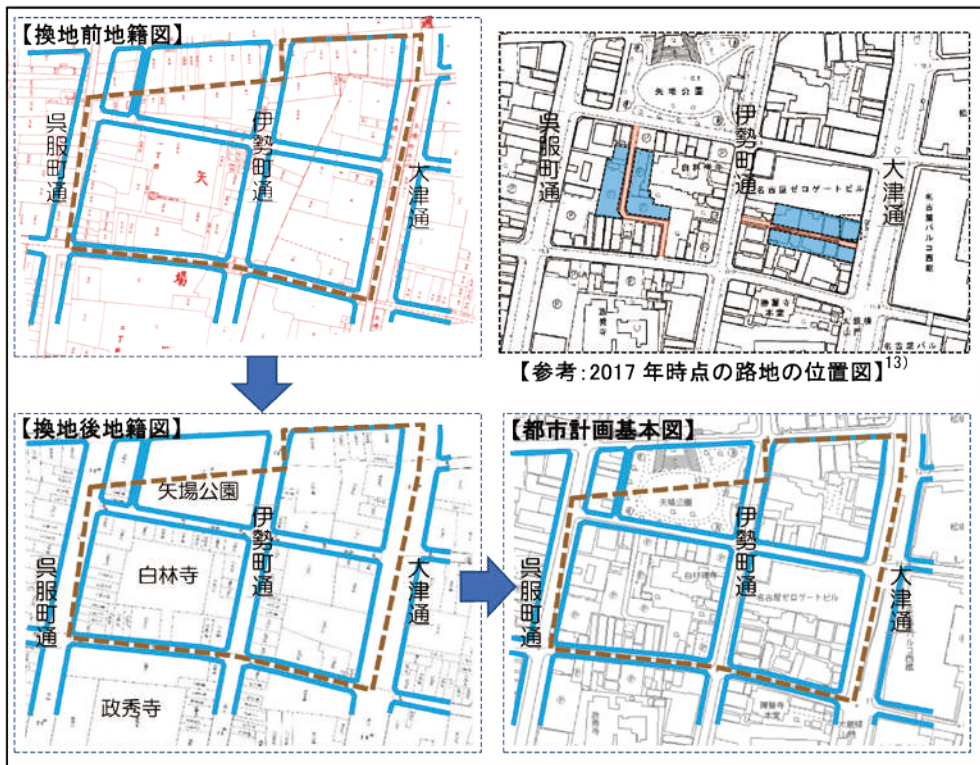


図25 白川ゾーン・タイプD（非碁盤割で寺町の街区）

る。

この4つの街区のうち、下二つの街区には現在も路地空間が残っている。左側の街区をD-L街区、右側の街区をD-R街区とすると、D-L街区の中央に位置する白林寺境内を南北に屈折して走る路地、もう一つのD-L街区のほぼ中央を東西に貫く路地がある。D-R街区の路地はこれがあることで、それに沿って駐車場を配置することが可能となった。D-L街区の路地は沿道両サイドに長屋が立地し、そこは現在、独特の雰囲気醸し出しているため、住宅利用は少なく、多くは物販・飲食店舗として利用されている。この路地の西端が白林寺の正門に通じることから、この路地が白林寺の参道のようにみえるが、図14および図15でみたように、歴史的経緯からみて全く別々の土地利用から偶然の一致をみたものである。なお、4つのうちの右上街区は、筆の大きさに合わせてビルが建設されている。地籍における筆の規模形状は建物利用に大きな影響を及ぼしていると言えよう。

## 4 まとめ

### 4-1 結論

- (1) 戦前（1933年）の碁盤割エリア、白川・大須エリアを対象に路地および住宅等の実態を把握すると、316路地、2,375戸の住戸等が存在していた。当時（1940年）の中区の世帯人員は4.8人であり、単純に掛け合わせると1.14万人となる。ちなみに当時の中区人口が18.7万人なので6％程度の路地人口シェアとなる。
- (2) 路地のタイプを①幟竿型（屈折を含む）、②糸巻型、③T型、④逆L型、⑤貫通型（屈折を含む）、⑥直角型の6つに類型すると、路地数では①幟竿型、④逆L型、②糸巻型の順に多く、住戸等数は、①幟竿型、②糸巻型、⑥直角型の順である。いわゆる①幟竿型の通路は奥の敷地に建つ一つの住戸等へ接続するものであり、他のように複数の住戸等へ行き来するタイプでないため、分析対象にしていない。その通路数＝住戸等数は341あり、路地数よりも多い。
- (3) 碁盤割エリアと白川・大須エリアの二つのエリアに分けると、エリア面積は小さいものの、路地数も住戸等数も白川・大須エリアのほうが多く、特に住戸等数では1.8倍の開きがある。
- (4) 碁盤割エリアでの通り別の分布状況をみると、南北のメインストリートである本町通の東西両街区の路地は非常に少なく、通りに面する路地は1ヶ所しかない。東西のメインストリートである広小路通の北側（碁盤割エリア）も同様に路地は皆無であった。二つのメインストリートに路地が少ないのは、格式ある商家が建ち並んでいたことと、空間として路地が発生しにくい筆形状となっているためであろう。
- (5) 碁盤割エリアの二つのメインストリートから離れるに従い、概して路地は増える。大津通の東西両街区群や現在の久屋大通街区群は路地が非常に多い。貫通型（この路地を「中道」と呼んでいる）路地は2ヶ所のみであり、江戸時代に形成されたものが、終戦まで存在していた。街区中央にある会所（閑所）が住宅地化されるにあたり、そこへアクセスする路地が不可欠である。また、寺社があると参道沿いの宅地が細分化され、店舗や住宅として利用される。
- (6) 白川・大須エリアでは多くの寺社が集積し、南寺町を形成している。そこでは寺社を囲む大街区



が多く、敷地（境内地）を有効活用するためには、主要街路や参道から時間的経過のなかで路地を順次延伸せざるを得ないため、複雑な路地形態になっている。

- (7) 戦後は復興土地区画整理事業（復興事業）により、道路は拡幅され、宅地30坪（約100m<sup>2</sup>）以上、間口3間（5.4m）以上の筆を確保するよう整理された。その際、変形的な筆も整形され、公道に接するように配置されているので、路地が生じる余地をなくしている。その結果、戦前（1933年）の路地は一掃され、1955年時点で路地数は12％、住戸等数は16％へと大幅に減少した。ただし、住戸等数は一貫して減少を続けたが、路地数は1975年で一旦増加したものの、1996年では1955年よりも下回った。
- (8) 終戦直後に応急措置的に路地が生じても、時間経過とともに建替えや土地の高度利用をはかるために、路地は消滅していく。複数の筆を利用した（借地の場合や売買による自己所有地化）大規模なビルが建設されている例はあるが、多くは復興事業の換地後の一筆を利用して建築物や駐車場などに利用がなされている。よって、筆形状に合わせて建設されるため、間口が狭くて奥行の長いビルが多くなる<sup>14)</sup>。
- (9) 現状でも残っている路地は数少ないが、戦前から存在している路地が継続している事例は、碁盤割エリアでは皆無である。白川エリアで7ヶ所中2ヶ所、大須エリアでは8ヶ所中皆無であった。復興事業により、路地については引き継がれていない。大部分は戦後に生成したものであり、根強く残存している路地は15ヶ所となる。なお、碁盤割エリアにあった南北貫通型の路地である二つの中道は復興事業で消滅したが、そのうちの一つは南北に貫通する筆形状が引き継がれている。そこに2棟の商業施設が建ち、屋内型の南北貫通路地のある飲食街が生まれている。一種の路地遺伝子とでも言うべき空間生成である。
- (10) これらの路地も将来にわたって存続する保証はない。都市再開発事業の対象になれば、建替わって消滅する。しかし、これまで残存してきたのは、土地・建物の権利関係が恐らく複雑化している可能性があり、そうすると再開発事業を実施していくには労力と時間がかかるため、今後とも残存していく可能性はある。

#### 4-2 今後の課題

都市の魅力の一つに路地空間がある。戦前は人口増加や商業需要を受け止めるために土地の高度利用の一種として路地が生成し、その沿道に住宅や店舗が立地していった。それらは木造密集地であり、災害には脆弱な空間である。戦災により市街地のほとんどが焦土と化し、江戸時代から手つかずであった中心市街地は復興土地区画整理事業により道路は拡幅され、公園が整備されて、路地空間は1～2割にまで減少する。戦後の路地はいくつかの例外を除いて、戦前を引き継いでいない。しかも時間の経過とともに消滅していき、残る路地空間はわずかとなっている。

これまで路地は自然発生的であり、計画的に整備されたものではない。防災性能の向上や自動車社会への対応をはかるために道路は拡幅されたが、画一的な幅員のため、沿線の建物利用も画一的になりがちである。大須エリアの魅力は道路空間の多様性から生まれる店舗等の多様にある。

よって、整備水準の高い都市基盤を前提に、都市空間の多様性を生み出すことで都市魅力を高めて

いく必要がある。そこで第一に、復興事業で創出された公共空間（道路や公園）を、屋外生活を豊かにしていくために活用していくこと（例えば、歩道を使ったオープンなカフェやギャラリー、自動車通行止めによる歩行者専用道化、車線減による歩道の拡幅など）、第二に水準の高い道路に囲まれた街区内に屋内型や屋外型の通路（これを現代版路地またはパサージュと呼ぼう）を設け、それらをネットワークしていくことで空間の多様性を生み出すこと、これらを実現していくことが今後の課題となる。

## 謝辞

本研究を推進するにあたっては、多くの方々から支援・助言をいただいた。名古屋市の復興土地区画整理事業に関連する多数の図面（対象エリアの換地前後の地籍図等）を名古屋市住宅都市局から快く提供して戴いた。また貴重な戦前や戦後の古い住宅地図は名古屋市鶴舞中央図書館に保管されていたため、実りある研究を遂行することができた。ここに記し、謝意を表する。なお、本研究は本学2017年度-2019年度名古屋学院大学研究助成（共同研究／課題研究／研究代表者：井澤知旦）「新名古屋論—歴史的文脈を踏まえた発展要因に基づく名古屋将来ビジョンの形成」による成果の一部である。

参考：土地に関わる用語の解説

| 用語 | 解 説                                |
|----|------------------------------------|
| 地籍 | 土地の位置・形状・面積・筆界などの地図に関する情報で登記情報ともいう |
| 筆  | 一つの土地を指す単位。筆（ふで または ひつ）            |
| 宅地 | 地目（他に田畑や山林など）の一種で建物の敷地およびそれに関連する土地 |
| 敷地 | 建物の土地を指すが、法律上、原則一敷地に一建物として扱われる土地   |

## 注

- 1) 井澤知旦〈2020. 6〉「都市魅力と“消毒”都市—名古屋都心における“界隈”の消失・生成と戦災復興土地区画整理事業の評価—」名古屋学院大学論集〈社会科学編〉Vol. 57 No.1 「消毒」についてはP. 31の表1およびP. 63
- 2) 参考文献【6】【7】を参照
- 3) 参考文献【8】ここでは名古屋市役所作成ならば都市計画事業に関する基礎資料として活用されたのではないかとの可能性を示唆している。
- 4) この図面は1929. 1933年の「名古屋市居住者全図」をもとに、Network2010が独自にみやすいように整理したもの。居住者等の名前は一部省略されている。
- 5) 参考文献【9】名古屋博物館編集発行「幕末城下町名古屋復元マップ」2013. 3 この地図は高力全休庵による①名古屋図（改定年1868）、②尾府全図（同1869）、③名古屋図（同1670）、④尾府全図（同1870）を用いて、

③をベースに適宜補完して作成されたもの。

- 6) 参考文献【7】の論文に示されたエリアは二つからなり、一つは、西は堀川、北は外堀通、東は久屋大通、南は広小路通に囲まれたエリア、もう一つは、西は伏見通、北は広小路通、東は久屋大通、南は若宮大通に囲まれたエリアであり、本研究との関連で言うと、拡大碁盤割エリアと白川エリアを加えた範囲である。また路地のカウント方法については相違すると思われるので、単純比較はできない。
- 7) 1940（昭和15）年時点の中区は、概ね広小路通より、南で中央線に囲まれ、西は堀川までの範囲である。よって、いわゆる碁盤割エリアは今回の対象となっていない。碁盤割エリアは1944年～45年にかけての半年間は栄区に存在した。戦後は栄区と中区が一体となって、ほぼ現在と同じ形状の中区となっている。
- 8) 戦後の低層高密度から高層高密度な市街地へ変化する経年変化は、参考文献【11】PP. 246-253の写真が参考になる。名古屋テレビ塔からみた東西南北の景観写真が示され、1954-1959-1972-1979年の変化がみて取れる。1959年から1972年の変化が大きい。
- 9) 1955年地図の「アメリカ村」とは、在日米軍の家族住宅地キャッスル・ハイツの呼称である。1945年に接収され、1958年に返還された。復興事業において白川工区として独立していた。
- 10) 1996年の碁盤割エリアの右上にある二つの通路はマンション（各々28戸、50戸）へのアクセス通路である。統計的には⑩旗竿型として扱っているが、例外的に表示している。
- 11) 2017年の図を掲載しているが、統計分析はしていない。参考のため、最新の路地の分布図として掲載している。
- 12) この街区の南北を貫く建物内通路（錦三丁目17番街区）については、参考文献【6】のPP. 61-62で言及しているが、その時点では工事中であり、飲食店舗開業の状態には触れていないので、改めてここで解説している。
- 13) 参考文献【6】P. 51 図16-2より
- 14) 参考文献【9】をみると武家地に大規模な施設が立地しているのがわかる。百貨店をはじめとする大規模商業施設やホテル、小学校などは街区の大部分を利用しており、町人地では大規模施設の立地は少ない。武家地の筆規模は大きく、町人地の筆規模が小さいことがその背景にある。復興事業によって土地の整理はなされるが、土地の履歴は引き継がれていく。

注 14) に関連して



碁盤割エリアにおいて戦前の筆形状をみると、町人地は間口が狭く、奥行きの長い宅地、すなわち15間(30m)から20間(40m)の奥行きが一般的であった。戦後は原地換地を原則としていたので、長さは短くなるも形状は相似形である。その結果、上記写真（左・中央）のように間口の狭いビルが連続することになる。上記写真（右）は1棟のビルのようにみえるが、2棟のビルであり、奥行の長さが間口の狭さを際立てている。

## 参考文献

- 【1】西村幸夫編著〈2006. 12〉「路地からのまちづくり」学芸出版社
- 【2】増渕敏行〈2012. 11〉「路地裏が文化を生む 細街路とその界隈の変容」青弓社
- 【3】上田篤・田端修編〈2013. 2〉「路地研究 もうひとつの都市の広場」鹿島出版会
- 【4】小林一郎〈2014. 6〉「横丁と路地を歩く」柏書房
- 【5】フリート横田〈2020. 12〉「横丁の戦後史」中央公論新社
- 【6】井澤知旦〈2020. 6〉「都市魅力と“消毒”都市—名古屋都心における“界隈”の消失・生成と戦災復興土地区画整理事業の評価—」名古屋学院大学論集〈社会科学編〉Vol. 57 No. 1
- 【7】杉浦大地他〈2015. 9〉「路地空間の分布と面積率の変化—名古屋市格子状街区における路地空間の変遷・利用実態に関する研究（その1）」日本建築学会大会学術講演梗概集
- 【8】鈴木智也他〈2015. 9〉「路地空間の空間特性及びその問題点と活用方法について—名古屋市格子状街区における路地空間の変遷・利用実態に関する研究（その2）」日本建築学会大会学術講演梗概集
- 【9】名古屋市博物館編集発行「幕末城下町名古屋復元マップ」2013. 3
- 【10】山田誠〈2012. 10〉「戦前期作成の住宅地図類に関する一考察」龍谷大學論集第480号PP. 8-31
- 【11】名古屋テレビ塔株式会社〈2018. 11〉「名古屋テレビ塔クロニクル」